

歴史

生い立ち

三角西港は、明治の新しい政府が国内統一と、近代的な産業を興し国を富ます「殖産振興」の政策に基づいて建設された地方港湾の一つで、全国で三カ所工事を進めたものの一つです。その港とは、宮城県のびるの野蒜港、福井



県の三国港、そして、熊本県の三角港ですが、これを明治の地方の三大築港と言います。

三角西港が開港されたのは明治に入ってからで、江戸時代（肥後の細川藩）の三角町は島原藩（長崎県）との国境の町として番所が置かれていました。これは、天草四郎で有名な1637年の天草・島原の乱をきっかけと

して、三角町に海から他の人々が入って来るのを見張る役割を果たしていました。

明治の初期、熊本県は西南戦争等で焼け野原となり、また、人の心も荒れ殺伐とした様相を呈していました。そのような状況で、工業などの産業を興して熊本県を活性化させることになり、そこで、県内の工場に材料などを輸入する港として、また、三池炭鉱で採掘された石炭の積出港としての「石炭運搬関連施設」として位置付けられ、港建設が計画されました。

その第一候補として熊本市の白川、坪井川の河口が決まりましたが、港の設計者として派遣されて来たオランダの技術者ムルドルは、河口では港が泥で埋まり港の管理に多額の経費が掛かるとの理由で、そこに港を造ることに反対しました。

そこで、熊本県のどこに港を作るか見て回ったムルドルは、三角西港は有明海に面し山々に囲まれた奥まった波静かな素晴らしい「天然の良港」として、三角西港に造ることを当時の県令（県知事）に話し、熊本県の議会も賛成し三角西港の建設が始まりました。

「特集」三角西港

ぶらり

MISUMI
WEST
PORT

紀行



石積み

石積埠頭

石積み波止場の長さは723m。埠頭・排水路・橋梁などのすべてが砂岩の切り石積みで施工されていて、大きな石を縦敷と横敷の交互に組み合わせた高度な石積み工法により造られています。海側の岸壁は、隙間なくきっちり積まれていてとてもきれいです。

石積水路と石橋

西港は水路に囲まれています。きれいな石積みで作られた水路は当時のまま。何とも言えない丸みが素晴らしい。
西港にはたくさんの石橋があります。今でも現役で、デザインもいろいろなものがあります。それぞれ細かいところまで作りこまれていて、構造としては大きな一枚岩を渡して作っています。

小泉八雲

小泉八雲（ラファディオ・ハーン）が西港を訪れたのは明治26年7月22日。長崎から船で熊本市への帰途、朝食を取るために立ち寄ったのが浦島屋であり、この浦島屋と八雲の出会いが紀行文「夏の日の夢」を生み出しました。

八雲は「三角に浦島屋という、西洋風に建てて造作した宿屋がありました。・・・甚だ奇麗な婦人Ⅱ蜻蛉のように優美・水晶の風鈴の鳴るような声をした婦人」と、美貌の宿の女将、山下よしを表現しています。そして、「緑側のスギの柱の間から、海岸沿いの美しい灰色の家並みが見晴らせました。そして錨をおろして、眠たげに休んでいる黄色い帆かけ船や、緑の大きな断崖の間にひらけた入り江の口や、その向こうの水平線までギラギラ照り映える夏の光が目にとまりました。」と西港を表現しています。八雲は半日ほどの滞在の中で、短編とはいえず、ひとつの紀行文を残すだけの感動を受けたのでした。八雲にとって、西港と浦島屋は生涯忘れられない思い出になったことでしょう。

